



元一関観光協会副会長／  
関が丘

## 柳橋新一さん

*profile* やなぎばし・しんいち  
1947年生まれ。調理師。一関観光協会の催事担当だった1997年、県からの打診を受け、地ビールフェスの実行委員会を一から立ち上げた。第17回まで会場の司会も担当した「地ビールフェス育ての親」。現在も相談役として頼られている。

## 【キーパーソンに聞く】 Key Person's Voice 地ビールフェスのあゆみ

### 「地域のため」変わらぬ思い 一関の魅力広めたい

地ビールフェスの開催は、県からの提案がきっかけ。試行錯誤しながらの船出でした。来場者数が伸び悩み、全国のイベントを視察したことも。福島県郡山市の「ビール祭」からは「1時間おきの乾杯」や「立ち飲み」など、現在の一関スタイルにつながるヒントをもらいました。

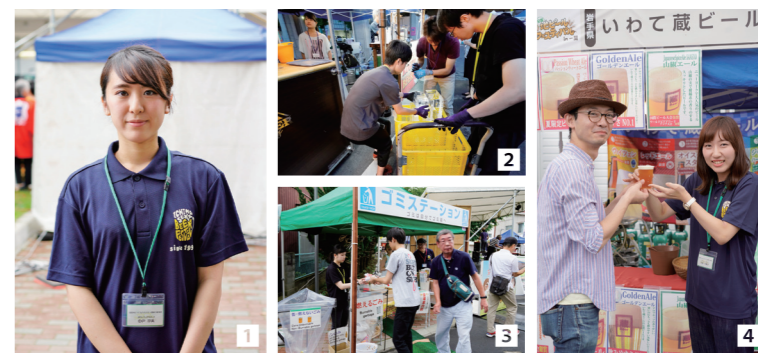
地ビールとともに、一関の魅力を広めようと始めたイベント。まちおしが狙いでした。一関の食材や料理を知ってもらうために「つまみは地元の食材を使う」というポリシーをずっと貫いています。

ファンのおかげで一関を代表するイベントに育ってくれた地ビールフェス。正直なところ、20年も続くとは思っていませんでした。出店メーカーや関係者の皆さんと培ってきた信頼が、大きな力になりました。関係機関がそれぞれの得意分野で活躍してくれるのも大きい。「地域のために力になりたい」というボランティアが増えているのもありがたいですね。

地ビールフェスにはまだ伸びしろがあると思います。近隣市町との連携、平泉町の世界遺産やインバウンドなど誘客のチャンスを見逃さないことが大切。「一関のために何ができるか」を考えながら若い世代にアドバイスしていきたいです。

### STAFFS

1 地域おこしとしての地ビールフェスに注目しているという白戸沙英さん／2 ビールを冷やす氷を慎重に運ぶ／3 大量のゴミを分別して回収する／4 心を込めてビールを手渡す



### にぎわい支えるボランティア

3万人以上を集客する地ビールフェスの運営には、ボランティアの存在が欠かせない。接客に携わった東北学院大

4年の白戸沙英さん(21)は「大学の卒業論文で地ビールのことをテーマにした。地域の力になれたらと参加しました」とにっこり。矢萩万柚子さん(20)は「地域のイベントに関わりたくて参加しました。お客さまの笑顔を見るのがうれしい」と喜びを語った。

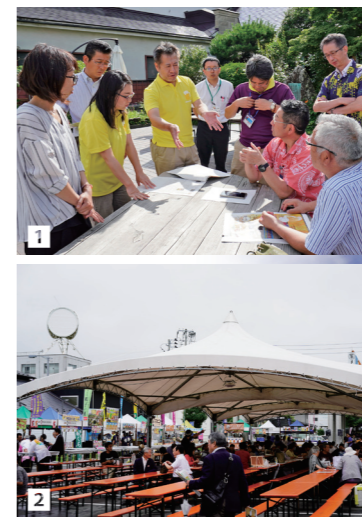
会場のゴミ拾い、会場案内やビールを冷却する氷の配布など、仕事は数多い。会場を見渡せば、それぞれの仕事に汗を流すスタッフの姿が目に入る。ボランティアやアルバイトなど、携わるスタッフの数は約150人。地域を盛り上げるために役立ちたいという温かい気持ちで、イベントの屋台骨を支えている。

### 常にニーズを探り進化続ける

地ビールフェスの企画や運営を行っているのは、市内の蔵元、飲食店、農協、金融機関、

## スタッフの思い。

一関を代表するイベントに成長した地ビールフェス。華やかな成功の影には「地域の力になりたい」というスタッフの熱い思いがあった。



### PROJECT COMMITTEE

1 ミーティングを重ねて企画を練るプロジェクト委員／2 花巻市のワインフェスティバルを参考に取入れた大型テント、テーブルやデッキチェアセット



### 「満足度ナンバーワン目指す」

全国地ビールフェスティバルin一関実行委員会  
神崎良一プロジェクト委員長

報道機関、行政などが組織するプロジェクト委員会。委員長を務めた神崎良一さん(57)は「お客さま第二」をモットーに掲げる。常にニーズを探り、変化し続ける姿勢が、来場者の満足度を高めている。

「昨年まで「閉塞感がある」と不満の声が上がっていたテナトを、天井の高い大型テント3張りに入れ替えた。雑然としていた会議用テーブルと折り畳み椅子を、テーブルと座席一体型のビアテーブルセットに変えた。進化を止めないことが、地ビールフェスの強みだ。節目の第20回では、来場者数3万人、出店社数100社と

それぞれ大台を突破したが、関係者に緩みはない。神崎委員長は「ファンのために何ができるか考え、『満足度ナンバーワン』を目指していく」とさらなる飛躍を誓った。

### 変わらない地域への愛情

「まちおこしがそもそもその狙いだった」と元一関観光協会副会長の柳橋新一さん(70)はフェスの歩みを振り返る。1997年に県からの提案で実行委員会を立ち上げ、第17回までの司会進行を務めた地ビールフェスの立役者だ。「二関の魅力は『食』。地ビ

ールをきっかけに、豊富な食材やおいしい料理で一関らしさを広めていきたい」とやさしいまなざしで語る。地域への愛情は、いつまでも変わらない。「地ビールフェスにはまだ伸びしろがある。近隣市町との連携や平泉町の世界遺産など、誘客のチャンスを見逃さないことが大切」と語る柳橋さん。新たに神楽など伝統芸能の魅力を発信することを構想中だ。この夏、地ビールフェスの会場が高らかに響いた20年目の「乾杯」。それは、同イベントが新たなステージに進み始めるのろしでもある。来年に向け、期待で目が離せない。

### Point 最新の情報は公式フェイスブックで



日程が決まると、会場周辺の宿泊施設が軒並み予約で埋まるという地ビールフェス。最新情報や過去の画像などは公式フェイスブック (<https://www.facebook.com/ichinosekibeer>) でチェックしよう。

